

社会情報学への時代の要請と教育の課題

The demands of the times and the educational challenges for Social Informatics

石田 博之

青山学院大学社会情報学部では、2012年4月、開設から4年が経過し完成年度を迎えることを機に、新しいカリキュラムをスタートさせた。これは、これまでの4年間で培った教育の成果を振り返り、さらに発展的にリニューアルしようという試みである。大きな特徴は、「何を専門に学び」「どのような力を身につけて」「何ができる人材になるか」という流れが学生にとってより明確に意識できるように、新たに3コース制を導入したことである。

はじめに

青山学院大学社会情報学部では、2012年4月、開設から4年が経過し完成年度を迎えることを機に、新しいカリキュラムをスタートさせた。これは、これまでの4年間で培った教育の成果を振り返り、さらに発展的にリニューアルしようという試みである。本稿では、まず社会情報学部の概要とこれまでのカリキュラムを概観し、次いで新しいカリキュラムのねらいと特徴を述べ、最後に新しいカリキュラム運用上の課題と展望について整理する。

1. 青山学院大学社会情報学部

社会情報学部は、2008年4月に青山学院大学相模原キャンパスに設置された。本学部の人材育成のねらいとしては、従来の文系、理系の枠に捉われない多角的な視点から現代社会の問題点をえぐり、その問題解決を自らが見出すことのできる学生を育てることである。



高度情報化社会の今日、科学・情報技術の活用なくしては、人や社会の問題解決は困難である。また、社会や人の問題解決抜きに科学・情報技術の活用は困難である。しかし、文系学部出身者にとっては技術活用の視点が、理工系学部出身者にとっては社会や人の問題解決の視点が十分でなく、本当の意味での問題解決に至るには壁が存在する。こうした共通の壁を乗り越えるために、本学部では、文系・理工系分野の教員が連携し、これまでにないカリキュラムの構成や教育方法の開発・共有

を進めている。

社会情報学部の学生数は、1学年200人の定員800人である。一般入学試験は大きくA方式とB方式に分かれており、前者は外国語(英語)、国語、地理歴史または数学、後者は外国語と数学で、募集人員はそれぞれ約95人、約30人となっていて、学生の多くは文系入試での入学である¹⁾。本学部が入学生に求めるのは、以下のような能力・意欲等である。

1. 現代社会を取り巻く諸問題について目を向け、それについて取り組むことの意義を理解することができること。
2. 現実の問題に目を向けたときに、そこに様々な要素・要因、特に「人間、社会、情報」の関わりに注目することができること。
3. 答えの存在する問題に取り組むのではなく、答えがないかもしれない取組みが存在すること、そのような問題解決の意義、またそのために必要な知識を習得していくという、「学び」に目を向けることができること。

そして、後述するカリキュラムを経て、以下の要件を満たす学生に対して、卒業時に学士(学術)の学位を授与する。

1. 数理的素養、論理的思考、コミュニケーション能力および情報の活用について、その基礎となる知識・技能を身につけていること。
2. 現代社会を取り巻く「人間、社会、情報」が複雑に絡み合った問題について、単一の専門領域だけでなく複数の専門領域からのアプローチが必要であることを理解できること。
3. それらの問題について、その要素となる一つ以上の専門領域について、その基礎を十分理解できること。
4. それらの問題を捉え、その問題解決に向けた取り組みについて、一定の方針を立てることができること。

2. 現行カリキュラム

(2008~2011年度新入生)

社会情報学部の教育課程は、全学共通の青

山スタンダード科目²⁾と本学部の専門教育科目で構成される。

(1) カリキュラム体系

社会情報学部のカリキュラムの基本コンセプトは「人や社会が抱えるテーマを文系、理工系という既成の枠組みを越えた立場から捉えること」、さらに「人や社会にかかわる問題と情報・数理の役割について理解し、その視点から問題を捉えなおすこと」を実現することにある。

それを実現するために、次のような科目群により構成される。青山スタンダードの教養教育に加えて「日本語におけるコミュニケーション」を重視し、日本語文章作成の訓練、プレゼンテーションの基礎を含む訓練を課す。分析能力の基礎となる「統計入門」を、社会・人間・情報を解明するための「基礎数学」を、それらを有効に活用するための基本となる「情報科学」「コンピュータ」の基礎を学ぶ。さらに、英語コミュニケーション能力を鍛えるために徹底したトレーニングを行う。各種専門領域は、これらの基礎科目の上に配置され、組織・心理を中心とした人間領域、経営・経済を中心とした社会領域、および数理を含む情報領域について深く学ぶ。さらに、それらの枠を超えた問題解決能力を身につけるため、演習、卒業研究へと展開される。

(2) 特色

本学部は、数理的素養、論理的思考、コミュニケーション能力および情報の高度な活用の4つの力をすべての学生必須のものとして位置付けている。さらに、この素養を武器にして既存学問分野である心理・学習、経営・経済および情報・数理のいずれか、あるいは複数の領域に踏み込むことによって、これら既存の分野を俯瞰し、さらに新たな価値の創造を目指す。また、これらを進めるにあたり、より

実践的なテーマによる演習を重視し、問題発見・解決に向けたトレーニングを重視した取組を行っている。

3. 新カリキュラム

(2012年度新入生～)

社会情報学部では、2012年度の完成年度を迎えるに当たり、2010年度に新しいカリキュラムを検討する委員会を学部内に発足し、検討を行ってきた。委員会のメンバーは、学部長以下、社会・情報・人間・数学・ヒューマンイノベーションの各領域より1名と筆者で構成された。検討議題としては、まず入口と出口(コース制)、次いで入学時の入門科目の精査、スキルを身に付ける科目のモジュールの洗い出し、そして既存カリキュラムの配置と科目間をつなぐ仕組みについてであった。

これまでも社会情報学部では、さまざまな領域が絡み合う現実の諸問題を発見・解決できる人材育成を目指してきた。この考え方は今後も変わらない。その上で、「何を専門に学び」「どのような力を身につけて」「何ができる人材になるか」という流れが学生にとってより明確に意識できるように、新たに3コース制を導入することとなった。

実社会で起こっているさまざまな問題は、単一の領域だけに関わるものではない。人間の本質に関わる「心理学」や「コミュニケーション学」、社会の動きをひも解く「経済学」や「社会学」、そして情報化社会の根幹となっている「情報科学」や「数理科学」といった領域が重なり合うところこそ、問題の本質がある。そこで、2つの領域が重なり合う部分(リエゾン領域)を、「社会・情報」「社会・人間」「人間・情報」の3コースとし、3年次からいずれか1コースに所属し、専門領域として学べるように設定した。学生はそれぞれのコースにおいて、重なる2つの分野の「エリア科目」と、異分野融合領域の「リエゾン」科目を履修することになる。これにより、各

リエゾン領域の問題に対処するための科目を効率的に選択することができ、社会へ出て即戦力として問題解決に取り組める力を確実に身につけることができるようになる。つまり、学生が各々の興味や関心に応じて、何を学び将来どんな人材として社会に出て行くかを明確に意識して学べるようにするのが、新カリキュラムの狙いである。

ただし専門領域といっても、コースの中で更にどちらか特定の分野に重点を置くなど、柔軟に科目を選択できるようにしているので、幅広い学び方が可能となる。現実の問題に対処するために、社会科学的なアプローチも数学的なアプローチも学習するので、高校までの文系・理系の区分けも関係ないのである。今、現実社会で起こっている問題に関心を持ちその解決に取り組んでみたいと考えている人に対し、実践的なスキルを提供するのが社会情報学部の学びなのである。

新しいカリキュラムでは、1年前期に人間・社会・情報の3領域すべてが重なった部分(フルリエゾン)の基礎を学ぶ3科目を必修としている。「ソリューション入門」では、各領域を専門とする教員が協力して、講義形式で分野融合(リエゾン領域)の姿や社会情報学部での学びの概要をわかりやすく解説する。「社会情報体験実習」では、プログラミング、株式シミュレーション、統計学で用いられる正規分布などの基礎を体験的に学ぶ。例えば、自分でプログラミングしてロボットを動かしてみることで、学部4年間の学びのゴールを体験的にイメージしてもらおうというものである。このように出口のイメージを明確にすることで、これから始まる授業が何のためにあるのかを理解し、学習意欲を高めることが目的である。そして、「ソリューション応用」では、各リエゾン領域において社会で活躍している人を招き、現実どのような問題が起き、それをどのように解決しているのかをお聞きすることで、学生が卒業後のイ

メージを明確に持てるようにする。さらに、1年後期には人間・社会・情報それぞれの基礎を学ぶ「人間科学概論」「経済学概論」「情報科学概論」といった科目も必修とし、2年次以降、どんな専門分野に進んでも問題ない基礎力を確実に養う。このように、1年次で社会情報学部での学びの全体像を理解し、2年次では各学生が自分の目指す方向を模索し、3年次から各リエゾン領域のコースを選択することになる。

各コースの学びで特徴的なのは、異なる分野の教員が協力し合い1つの授業を受け持つことである。例えば、「社会」と「情報」が重なるリエゾン領域の「情報産業論」という科目では、情報・エネルギー・金融・観光などの教員が協力し合うことで、例えば「スマートグリッド」といったITを使った最新の省エネ技術などについて学ぶことができる。授業形式も、それぞれの教員が専門分野について講義することもあれば、1つのテーマに対して異分野の教員が学生の前でディスカッションを繰り広げるということも考えられる。こうした授業によって、複数の領域にまたがる問題への関心を高め、複雑に絡み合っ

た実社会の問題に幅広く対応できる力を培う。

これまで社会情報学部が力を入れてきた全ての学びの基礎となる英語、コンピュータ、数学（統計学を含む）の授業は、新しいカリキュラムでも存続する。これらを学び、身につけることは本学部だけでなく、卒業後にどのような方向に進むにせよ強力な武器になると考えている。

4. 運用上の課題と展望

前述のように新しいカリキュラムは、これまで以上に融合領域を中心としたコースの運営が中心となっている。そのため運営上においては、学生の負担（既存の文系・理系学部より多領域）や教員の負担（専門を超えた教育内容の提供）などの課題が考えられる。また、社会のニーズは時事刻々と変化しており、カリキュラムの内容をいかにそれらの変化に適切に対応させるのかも今後の課題である。

新しいカリキュラムの就職活動への効果が見えるのは今から4年後（2016年3月）であるが、本年3月に卒業した1期生の就職先をみると、製造業、卸小売業、金融・保険業、

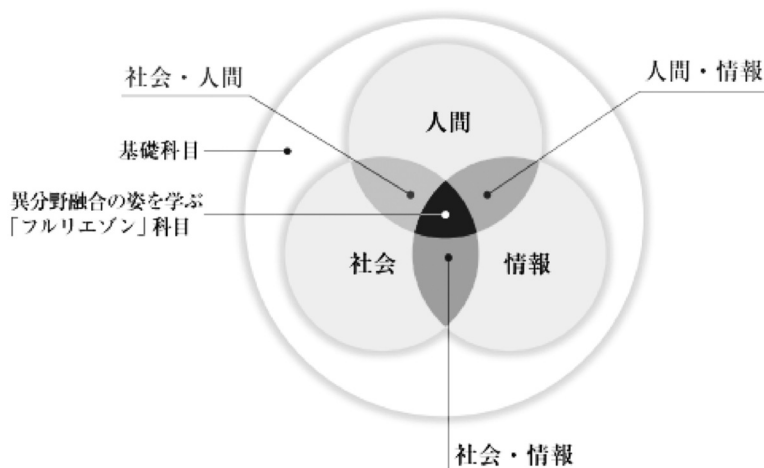


図 社会情報学部カリキュラム (2012年度)

(出所) 青山学院大学社会情報学部 HP

(<http://www.si.aoyama.ac.jp/curriculum/index>)

運輸・通信業，サービス業から公務員・教員まで多種多様な業種にわたっており，さらに全体の約2割の学生が技術系として採用されるなど，従来のカリキュラムでも一定の成果が見られていることから今後一層の充実が期待される場所である。

注

- ¹ 一般入試の他に，センター入試，推薦・特別入試がある。
- ² 青山スタンダードは，2003年度にスタートした青山学院大学の全学共通の教養教育で，学生は所属学部・学科に関係なく「青山スタンダード科目」を履修することによって，学問的なも

のの考え方，分析の仕方，調べ方，表現の仕方の基礎的な技法や学問的な作法など幅広い教養を身につけることができる。「およそ青山学院大学の卒業生であれば，どの学部・学科を卒業したかに関わりなく，一定の水準の技能・能力と一定の範囲の知識・教養をそなえているという社会的評価を受けることを到達目標とする」のが基本的なねらいとなっている。

参 考

- 青山学院大学 HP 社会情報学部 (<http://www.aoyama.ac.jp/faculty/ssi/>)
- 青山学院大学社会情報学部 HP (<http://www.si.aoyama.ac.jp/>)